

中部圏の優れた建築作品を表彰する「中部建築賞」－第49回受賞作品

中部建築賞協議会

中部建築賞は、1969年に全国に先駆けて創設された地域レベルの建築賞として、中部圏域の地域社会の発展に寄与し、かつ「持続可能な社会」を目指すという時代の要請に対応し、地域と環境に根ざした優れた作品に対して、その功績をたたえ、さらに優秀な建築作品が生まれる基礎を築くことを目的としています。中部圏（中部圏開発整備法第2条第1項に規定する富山、石川、福井、長野、岐阜、静岡、愛知、三重、滋賀の9県）内の22の建築関係団体で構成する中部建築賞協議会（会長 藤井良直：公益財団法人中部圏社会経済研究所代表理事）が、中部圏域内で新築、改修、修復がなされた建築物を応募の対象として、建築主、設計者、施工者の三者を表彰するものであり、一般社会と建築プロフェッションを結びつけ、また、建築がその地域社会においても重要な文化性をもっていることを広く一般に認めていただくことに役立つとともに、受賞作品が中部圏のひいては日本の貴重な社会的文化財としていつまでも輝き、地域の人々に愛されることを期待し、毎年行っております。

今回の第49回は、応募作品も過去2番目に多い118点（一般部門67点、住宅部門51点）に上り、建築家の栗生明審査員長始め8名の審査員の厳正な審査のもと、入賞13点、入選6点、特別賞2点が受賞し、表彰式が2017年12月13日に名古屋市内で行われました。大変魅力のある作品が多く、審査員の講評とともに一般部門受賞作品をご紹介します。

2018年に50回目の節目を迎え、「50周年記念事業」を実施する予定ですが、50周年を機にリニア開通に向けた中部の新しいまちづくりになお一層貢献してまいります。

第49回 県別応募数、表彰数

県別	一般部門				住宅部門				合計				
	応募数	入賞数	入選数	特別賞	応募数	入賞数	入選数	特別賞	応募数	入賞数	入選数	特別賞	表彰数
愛知	23	3	0	2	23	2	4	0	46	5	4	2	11
三重	7	1	0	0	1	0	0	0	8	1	0	0	1
岐阜	6	3	0	0	4	0	1	0	10	3	1	0	4
静岡	8	2	0	0	6	1	0	0	14	3	0	0	3
福井	6	1	0	0	3	0	0	0	9	1	0	0	1
石川	5	0	0	0	6	0	1	0	11	0	1	0	1
富山	5	0	0	0	3	0	0	0	8	0	0	0	0
長野	6	0	0	0	3	0	0	0	9	0	0	0	0
滋賀	1	0	0	0	2	0	0	0	3	0	0	0	0
計	67	10	0	2	51	3	6	0	118	13	6	2	21

一般部門の受賞作品

1. 入賞

(1) 新城市立作手小学校・つくで交流館・作手総合支所（所在地 愛知県新城市作手）

愛知県東部内陸の新城市のうちでも作手地区は、

山懷に抱かれ歴史と文化が香る自然環境が息づく。地元の待望久しい統合小学校+地域交流館のこの複合文化施設は、設計初期から数年かけてみんなで考え活動して想いを育んできた、大人と子どもの「共育の場」であるという。

迎える外観のたたずまいは確かに、周辺の山並



みになじむ切妻屋根の連棟と高さを揃えた深い軒先や、黒い勾配屋根と木の鼻隠し・外壁が高感度であり、道路対面の支所庁舎とのさりげない統一感もいい。ただ第一印象として、交流館ホール部分の淡色の箱状マッサと校地を結界する立派な正門棟とはやや異質感が残った。

グラウンドをアクセス・日照・寒風除けに好適な南東にまとめ、程よいスケールの中庭を囲んで2つの機能の分化と相互乗入れを図った配置計画は絶妙で、運営上の好首尾と意気込みも実感できた。芝張りの整然とした中庭を軽快な列柱の深い回廊空間が巡り短辺正面に夢のある「プリン型」ランチルーム棟でくくる構成は、子どもや地域の多彩な3イベント展開の場となるシーンを愉快地想起させる。

構造3計画の内部・小屋組みへの随所の木架構造演出も場相応の意図を感じて趣き深い。普通教室上部のロングスパンに光と風を取り込む傘状の大屋根・特別教室上部のシンプルな木トラスと中廊下上部のS材ハイブリッドの高窓アーケード・体育館梁間に連なる樹木並木状の木柱+方杖・・・と、木の恩恵に包まれた豊かな内部空間体験が地域と子どもたちを末永く育むことを祈ってやまない。

現地に伺った月曜午後は子どもたちの日常活性に触れたいもくろみであったが、折悪しく前週の台風で週末順延となった運動会の代休日と重なって、校内は閑散としていた。それでも、グラウンドに臨む普通教室棟の土間空間に連なるてるてる坊主やテープ止めの応援紙片にその余韻を見て、山間に響く子どもたちの歓声に想いをはせた。

(建築家 鈴木 利明)

(2) ATグループ本社北館・南館 (所在地 愛知県名古屋市昭和区高辻町)



幹線道路のコーナーに位置する4つの街区を対象とするビル群。そのうちの長辺に面した二街区が当該応募作品の対象となっている。そこから奥まったほかの区画は平面駐車場と他設計者による建築(建築意匠コードをかけている)となっている。中間に存在する公道は私道的な性格となっている。

応募作品のデザインの特徴は、長辺に面した二街区全長140mに渡るガラスショールームを構築する木構造と9系列社の事務室を内包する事務棟の立体構成だと言える。全体の設計に避難検証をかけている。

交差点に向けてうねるように天井高さを高くして存在をアピールしているショールームの屋根を支える木造梁は、信州産唐松集成材にモルタルバーを張って燃え代で包んだ大断面構成になっている。木造を視覚的に強調したいという思いと、梁成の全高を露出させないで圧迫感を抑えたいという思いが交錯する。梁側面に照明を線状に設置しているのは、夕刻のショールームの外観に強いインパクトを与えている。梁の外端を受けるのは削り出しの細いH断面スチール柱でガラスの風圧受けリブを代用している。木梁と鉄柱の接合パネルゾーンは火災時の熱伝導を防ぐためコンクリートの塊を入れてある。まだまだ規制の多い木造使用を見事にクリアしている。

事務棟は、系列と言えども販売競合関係にある9社の事務室を内包するため、干渉バッファゾーンとして吹き抜けの中庭を設けている。専用部分

と共用部分をミックスしながら、自社ビルならではの心地よい余裕のある事務スペースを実現している。

そのほかの部分でも周辺環境の特性を読み取りながら、デザインに反映させている。全体にわたり大胆なアイディアと細心のディテールデザインが相まって高度に洗練された建築が完成している。
(建築家 関 邦則)

(3) こじまこども園 (所在地 愛知県豊田市金谷町)



計画地は豊田市旧来の農業中心地にあり、近年住宅地として高密度・人口増のすう勢の中、整形・平坦な大画地で周辺施設群とも連携できる好環境に恵まれる。広々とした敷地にのびのび格調高いシンメトリー配棟と豊かな外部空間が存分に展開され、地域の誇る「こども園」となっている。

建築主の高い理想追求と長年の実践蓄積がそれを可能とした原動力であることが、現地に立って改めて実感された。「循環と再生」の大きなテーマのもと、子どもたちを育み次代や地域社会につながる環境づくりはもとより、木造園舎の木材調達・製材やリサイクル可能な高機能チタン瓦の開発・採用の自製化に至る懐の大きさも特筆したい。

建築計画は実にカチッとして端正である。配置・平面計画では南北中心軸対称に、30mスクエアの芝生広場に深いピロティ回廊を巡らせ、2.5m (一部±α) グリッド上に規則正しく均一な保育室群がコの字型に囲む構成で、断面は大らかな勾配梁の木架構に光や風が遊ぶデザインに統一される。背丈も能力も差異がある0歳児～5歳児にとっ

て同一空間体験の適否が気になったが、各々の居住域設え配慮などでフォローアップされている。

30mスクエアの外部空間が幼児にはいかにも過大かとの懸念は、各齢相応の闊達^{かたつ}を自然結集した集団行動を目の当たりにしてすっかり払拭された。さらに芝生広場から渡り廊下をスルーした南面前庭の「ミニタウン」では、小さな丘や草木・池や畑を自在に擁した柔らかな地域開放感の中で、園児たちは「はだしの生活」をたくましく謳歌^{おうしょく}する。

きめ細かな設計監理と超タイトな工程管理においても、建築主・設計者・施工者のノウハウと努力の結集が感じ取れた。総合図による相互確認が徹底され、既存解体を含めて丸1年(改築実体は9ヶ月)の難工期の中で前述の施主支給資材2件が絶大な突破力となった。いずれ、プロセスでの諸苦勞を感じさせない堂々の社会資産である。

(建築家 鈴木 利明)

(4) 松阪市子ども発達総合支援センター そだちの丘 (所在地 三重県松阪市下村町)



松阪市郊外の山裾に位置する、心身の発達に遅れや心配のある子どもとその家族が、日常的に通いながら支援を受けるための施設である。およそ2,300㎡の木造平屋建ての施設は、子どもの年齢に応じたいくつかのゾーンに分けられ、大小の中庭を囲みながら、要所にラウンジを設けた幅の広い廊下によりつながれている。施設の性格上、諸室の機能や構成は固定的であり、また敷地外周に対しては閉鎖的な構えとなっているが、中庭とセットで段階的に構成されたゆとりのある動線空間により、十分な開放感と空間の多様性が担保されて

いる。

各ゾーンは、住宅スケールのボリュームに分節された部屋の集まるクラスターとして構成され、各ボリュームは地場産の小断面規格材を用いた在来工法により架構される。目を引くのは、施設全体で30数室ある諸室の壁仕上げや天井の形状が、ことごとく異なったものとしてデザインされている点である。ある種の発達障害をもつ人の暮らす環境の整備にあたっては、行為とそれを行う空間とが分かりやすく関連付けられること＝「空間の構造化」が重要とされている。ここではその考えの元、空間の仕上げや形状を変化させることで各室の区別を容易にし、そこで行われる行為との対応を認識しやすくすることが企図されている。「空間の構造化」は、一般には室内の間仕切りなどで行われることが多く、建築スケールにおいてここまで意識的にデザインされることは、管見の限りまれである。ぜひ今後の利用を通じて、その有効性の検証を行っていただければと思う。

このような施設こそむしろ町中であってほしいという立地の不満、また室構成とディテールの中間にもう少し細やかな配慮がありえたのではないかと若干の疑問は残る。しかしながら、このような社会的意義の高い企画を行った発注者、それに密度の高いデザインと施工で応えた設計者・施工者らにより実現した、意欲的な公共建築である。(京都大学工学部准教授 柳沢 究)

(5) 北方町庁舎 (所在地 岐阜県本巣郡北方町)



どこの都市においても、庁舎建築は住民にとってシンボリックな存在として受け止められているのではないと思う。そのシンボリック性は、先進事例を参考にしながら、さらに豪華に、さらに大きく

(高層に)といった発想や方法によって実現されていくことが多い。

当該応募作品は、そうした庁舎“らしい”建築の延長線上には位置していない。いわゆる“らしくない”建築というのが第一印象である。小さな町の小さな庁舎であるが故に、既定の庁舎建築タイプに拘束されない庁舎のイメージを実現することが可能だったのだろうか。この庁舎の設計にあたっては、庁舎建築を模索するところからスタートしておらず、むしろ新しい地域のシンボリックな存在を追求するところからスタートしているのだろうと感じた。寺院の屋根や合掌づくりの民家にも通じる大屋根のような形状をモチーフとした建築イメージは、庁舎という機能を消し去ったとしても存在を主張できる強くてわかりやすいシンボリック性を感じさせる。

外観は穴(切り込み)だらけの傾斜屋根が乗った巨大な住宅といった形状で、支柱のない深い軒下空間がとても開放的で魅力的な印象を受けた。屋根形状よりも、むしろ軒下空間のほうが日本の建築の特徴を作り出しているのかもしれないと感じるほどであった。1階の北面、南面はガラスになっており、部分的に全開口できるので、縁側的な中間域としての軒下空間の存在によって、外部空間とのつながりが心地よく、利用しやすいものとなっている。

上階においても開口が散りばめられており、採光や通風がとられていることから、住宅感覚を体感することができ、エコにもつながっている。吹き抜けの配置や空間構成に伴うスケール感も良く、屋根面内側の傾斜壁もボックス型の建築にはない魅力として受け止められている。追随されることのないユニークさに輝く建築であると思う。

(建築家 関 邦則)

(6) こやまかわせみクリニック (所在地 岐阜県本巣郡北方町)

平面プランを初めて見た時、従来の医院建築で見られる多様な用途を持つ諸室を、整然と並べる機能重視の枠から外れ、自由奔放に楽しく、面白



く、まるでおもちゃ箱をひっくり返したような平面計画に興味を湧いた。

クライアントからの要望は“元気な時にも立ち寄れるカフェ”のイメージで落ち着きとにぎわいのある「新しいまちの居場所」を設計して欲しいとのこと。

外観は、杉羽目板張りと、大きなガラス面の無機質的アルミカーテンウォールをリズムカルに組み合わせ、まるでおしゃれな1つの小さな街並みのようなたたずまいの構成となっている。角地よりパークパスと名付けられたアプローチは、住民が気軽に敷地を通り抜けでき、風防室は診療時間外の待合カフェコーナーとなる。内科、小児科の西洋医学と、漢方、鍼灸しんきゅうを取り入れた医療を実践するクライアントは、子供から老人まで多様な患者を受け入れるため、待合室にはそれに合わせて多様なコーナーが設けられている。

受付事務、診療、処置、レントゲンといった諸室を小屋という単位に分解し、離散的に配置。その間の外気に抜ける空間は光と風を取り入れ、植木や薬草が植えられた小さな庭が眺められる。不規則に配された諸室により廊下部分は多様な患者が思い思いの場所で自由に時間を過ごす待合スペース（クリニックコリドー）となっている。

各小屋は片流れ勾配屋根の木造在来軸組工法で、コリドーをカバーする鉄骨造の大屋根は、各小屋の棟木の上部に固定され、上部から射し込む光によりコリドーに開放感を持たせている。また、天井は鉄骨梁はりに架けられた米松集成材の表し垂木掛けとし、連続感を持たせている。各諸室の入口にはヨーロッパの街灯風な照明器具でコリドー（中

廊下）に地中海地方の異国の路地、古い街並みを想い起こさせる。

見学時にも子供から老人まで、診察までの退屈な待ち時間に本を読んだりコーヒーを飲んだり、色々な場所を利用しているのを見ると、クライアントの要望にかなった建物だと評価できる。

（建築家 山田 貴明）

（7）多治見市火葬場 華立やすらぎの杜（所在地岐阜県多治見市大藪町）



建設地はゴルフ銀座と呼ばれるほどの丘陵地で、豊かな森に囲まれ、その存在に厳しい目が向けられる「火葬場」のような施設には、立地として適した環境である。迫間洞の地名からもわかるように、近くに交通量の多い主要地方道路に接しているにも関わらず、一步入り込んだ静寂の中で故人との別れの場となる家族にとってより自然な形で安らぎや親しみが感じられる「家」のようなたたずまいを意図している。

この環境の中に、その森に伏せるような3次元曲面の大屋根がこの建物の最大の特徴である。

日本古来の寺院建築の大屋根は、重量感を強調しているのに比べ、緩やかな勾配屋根と深い底ひさしで水平性を強調することで、建物高を低く見せ威圧感をなくしている。北側、池に沿った円弧上のガラス面は統一され「癒しの顔」を見せているが、人々を迎え入れる「正面の顔」は、3次元曲面故に複雑な形態になるのは致し方ないと思う。反面、躍動感、開放感のある大胆なデザインとなり、それなりに面白いと思う。

屋根材としては、縦葺たてぶき金属屋根で瓦棒部分を本

瓦とする事で日本古来の瓦屋根の質感を持たせ、焼き物のまち「多治見」らしさを表現している。この大屋根を支えるキールトラスを採用した架構は、開放的な無柱空間を生み、またハイサイドからの自然光、自然通風により、遺族や会葬者の重苦しい気分をとき放つことができる。キールトラスを魚の背骨に見立てた時、それから外に伸びているあばら骨のようなH型钢材は、下フランジを天井面に露出させている。大きなガラスを通し、外側の軒先まで連続させたシンプルな天井面は、軸組みを魅力ある意匠的アクセントとしている。

あばら骨を端部で支える柱は、鉛直荷重のみを負担する細柱となり、待合ロビーからガラス越しに修景池を望む時、里山の風景の目障りにならず、外部空間の一体感がうまくいっている。

内部空間の演出、豊富な蓄積された知識による設計ディテールなど、全体として大いに工夫され評価できる。ただ1つ、来訪者が敷地に進入する時、最初に訪れる駐車場に、空調置場などのサービス空間が目にとまるのが気になった。

(建築家 山田 貴明)

(8) 静岡理科大学 建築学科棟 えんつりー (所在地 静岡県袋井市豊沢)



静岡理科大学は、静岡県で初めて総合建築学科を立ちあげた。「えんつりー」と名付けられたこの建築は、既存のキャンパス内に、新設された建築学科の校舎として計画されている。

既存の建築群の配置・構成や、ランドスケープが丁寧に読み取られ、軸線を生かす建物形状が生み出されつつ、キャンパスモールの中心軸に沿っ

て「大きな軒下空間」が設けられている。この何層にもわたって立体化された軒下空間は、単調になりがちな校舎群のなかで、彫りの深い表情を持ち、人々を引き寄せる効果がある。加えて表層の透過性を高めることによって、建築内部は前面の中庭と一体化して見える。この建築は、学生や教職員が自由に集う場となり、さらには地域の人々をも誘引する場となる空間的役割を担っているからである。こうした空間構成は、「地域と連携し、地域に根ざし、地域に貢献する人材を育む大学」という大学創設理念を空間化したとも言える。

接合部に鋳物を用いることで、滑らかにつながあわされた樹状柱は、なだらかな山の稜線りょうせんに囲まれた自然豊かなキャンパスの中で、自然樹林と呼応させた大学の魅力的アイコンとして機能している。(学長の名刺にもこの写真が刷り込まれていた。)さらに、「モノからはいる教育」という教育理念に呼応するように、この建築の内外は徹底して「モノ」のアッセンブリーによって成り立っている。つまり校舎そのものが「生きた教材」になっているのだ。構造、設備の要素の露出、床、壁、天井の素材、さらには照明、家具、什器にいたる多様さは、学生が実際の「モノ」に触れ、自ら体験し、そこから気づき、考え、発見し、1人ひとりが成長し、やがてきらりと輝く個性を創り出していくことが期待されているからである。

可能なかぎり間仕切りを廃し、視線が通りぬけることで、お互いの存在を確認できるがらんだような空間は、さまざまな出会いや発見を生み出し想像力(創造力)を活性化させる。このことも、この地域で使われる方言「やらまいか」(いっしょにやってみよう)をとり入れた大学の基本理念「やらまいか精神と創造性」と合致したものになっている。

本年4月に初年度の学生を受け入れたばかりの校舎であるが、年度を重ね、学生、教職員、地域の人々の参加によって、より豊かな空間に成長することが期待される。まさに「やらまいかの建築」と呼べるものが実現している。

(建築家 栗生 明)

(9) 実相寺毘沙門堂（所在地 静岡県静岡市清水区清水町）



西暦800年代に創建された古刹の境内に建つ、小さな毘沙門堂の改築である。この建築は、通夜を執り行うための御堂であると同時に、地域コミュニティの新たな芽吹きになりうる「生と死の祈りの場」として計画されている。

規模は小さいものであるが、隅々にまで神経がいきとどき、その設計密度は非常に高い。

厳密に選択された材料の質感と、コントロールされた外光、燭台の灯、夜間の照明によって、ほのかにたち現れる空間は、物理的には狭い空間であるにもかかわらず、広大無辺の空間に昇華されている。そのことによって、誰もが堂内に入った瞬間、自然と頭がさがり、手を合わせ、祈らずにはいられないような、空間の精神性が獲得されている。

平面形を見ると、仏教上、宇宙全体や世界の中心を意味する八角形の骨格を、四角形のボリュームの中に内包させる空間構成になっている。故人と自己が向かい合う強い中心性を持った八角形空間に対し、低く抑えた方形の屋根と四角い外形は、近隣環境との調和を意図していると同時に、余白の壁に囲われた残余空間には、機能的に必要な諸室が無理なく納まっている。抑制された静謐な空間は、建築家、家具作家、金物作家、造園家、そしてクライアントである宗教家との、緊密な協同作業によって実現されたものである。

仏教的な意味をまとった栗材の8本の八角柱、椅子、安置台、秘仏を納めた厨子、光を豊かに導く砂漆喰の天井と壁、金属の照明器具、扉の引き

手、燭台、花入れ、既存の松を効果的に配した造園、自由に立ち入ることができる境内を柔らかく縁取るフェンスなど、それぞれ適切なスケールと材質、造形の確かさにより、品格のある宗教空間が実現している。

（建築家 栗生 明）

(10) ヒュッテナナナ（所在地 福井県福井市古市）



両端接道の細長い敷地のほぼ中央に配置され、建物の南側は庭、北側は畑。東西の中心軸を切り妻の棟とし、南北両面の通りに対して裏表なく向けられた透明な切り妻面は、軽やかで重力を感じさせない。住宅ではなく仕事場という半公共空間であることが、この建物の透明性に説得力を与えている。

木造のガラス真壁造りとでも言うべきか、仕上げ材を排除し、空間をつくる要素を空間の形をつくる構造材と屋内外を切り分ける複層ガラスや断熱材+屋根材という性能材料に限定しているが、東西隣地側への深い軒の先に設けられた「御簾」のようなルーバーは、隣家と仕事場とのバッファーをつくとともに家型を抽象化する。

一見、変哲なくスルーしそうになるが、地面とフラットに仕上げられた基礎天端、床面を85cm持ち上げる鉄骨の土台と風が通り抜ける床下、建物から分離した屋外機の隠れた存在など、それらのディテールには普通じゃない「普通さ」が仕込まれているのである。

施主がPCにむかって仕事をされている横で、建築家が作品について語り、私は施工者ヘンピア

な現場の苦勞を聞き出そうと思って質問をしているところに、時々、施主が日々について教えてくださる。西日対策のため、あらたに軒下にすだれを下げたり、緑のカーテン（ヘチマだったと思う）を実験中とのことで、そういった付加物が原形に絶妙になじんでいた。また、鉄骨土台にわたされた割り竹はなににつかうのですかと尋ねたら近隣をまきこんでの流しそうめん企画用という返答があった。

「ヒュッテ」という軽やかな響きと「ナナナ」とすこし謎めいたリズムのあるネーミングが示すように、必要最小限の小屋でありながら、日々の時間やめぐる季節を楽しみ、住職近接に加え仕事を街にコンタクトさせた羨ましいライフスタイルの舞台である。

（建築家 加茂 紀和子）

2. 特別賞

（1）JRゲートタワー（所在地 愛知県名古屋市中村区名駅）



この複合施設はJR名古屋駅に直結するJR セントラルタワーズ、地下街のGate Walkと一体となる再開発事業であり、商業、レストラン街、ホテル、オフィス、バスターミナルなどからなる大規模複合建築である。同時に、この場所はJRと地下鉄やバスの交通結節点であるとともに、隣接するJRセントラルタワーズやJPタワー名古屋とも接続しており、大量で多様な通行量をさばく交通空間としての機能も必要とされる。

その理由から、駅前広場のガラスの大庇ひさしの設置、バスターミナルや地下通路の整備、JR名古屋駅

2階デッキより直結する歩行者通路、15階のスカイストリートや屋上テラス、歩道の拡幅など、数多くの公共空間の整備がなされている。外観は大規模施設の単調さや圧迫感を軽減するため、文節したボリュームとなるような凹凸が施され、高層部は大通りからセットバックして配置されている。

内部空間では、商業施設の2～4階部分は大きな吹き抜け空間を有しているおり、3・4階部分は複数の空中デッキで結ばれ商業施設のにぎわいや楽しさを表出させている。また、この2階部分が歩行者通路として隣接するJR名古屋駅2階デッキやJPタワー名古屋とつながっている。15階の空中庭園はホテルのレストランガーデンとして利用されているが、ホテルやオフィスのフロント階であり、スカイウォークの接続階でもあることから、空中庭園の緑は多くの利用者に安らぎを与えるものとなっている。このほか、低層階屋上や歩道の植栽などにも積極的な緑化が行われており、都市の環境性向上に力を入れている。

以上のように、公共空間の提供、外観および内部空間のデザイン、構造・環境性能、施工精度に至るまで非常に完成度の高い公共的建築として仕上がっている。

（金沢工業大学環境・建築学部教授 川崎 寧史）

（2）JPタワー 名古屋（所在地 愛知県名古屋市中村区名駅）



JR名古屋駅と直結するJRゲートタワーに隣接する大型複合施設である。郵便局を中心に商業施設、レストラン、地下街、オフィス、バスターミナル、タワーパーキングなどからなる複合施設である。特に、隣接のJRゲートタワーからの接続が配慮され、貫通通路やバスターミナル、地下通路の接続、歩道の拡幅（アベニューガーデン）によりJR名古屋駅方面からの人々が円滑に利用できるようになっている。

3層吹き抜けのエントランスのアトリウムには、巨大な空間オブジェの設置やメディア・アートが投映され、上質な内装デザインで来館者を迎えている。また、アトリウムと接して配置された店舗「KITTE NAGOYA」の内装や照明、サインのデザインも洗練されている。低層部分の外装は透明度の高いガラス面で構成されているため、大通りからの外観として、これら店舗の上品なにぎわい風景が街に表出されている。

メインとなるオフィスフロアはフレキシブルな利用に対応できる機能的な仕組みであるが、13階のオフィスサポートフロアは「樹上のオアシス」をコンセプトに、高級感のあるラウンジ・スペースやカフェ、食堂、会議室を有し、商談や接客などに対して上質のもてなしができる工夫がなされている。

このほか、この建築ではアトリウム以外にも2階オフィス・エントランスのオブジェ、2階貫通通路における和紙壁、低層階エレベータホールや会議室階における左官壁など、アートプロジェクトをふんだんに取り入れていることが空間デザイ

ンの特徴となっている。また、貫通通路の先にはテラスと大階段からなる潤いのある公共スペース（ステップガーデン）が設置されており、くつろぎのある滞留空間を提供し緩やかに街へとつなげている。

以上のように、公共空間の提供、外観および内部空間のデザイン、構造・環境性能、施工精度に至るまで非常に完成度の高い公共的建築として仕上がっている。

（金沢工業大学環境・建築学部教授 川崎 寧史）

中部建築賞協議会加盟団体 愛知建築士会 岐阜県建築士会 三重県建築士会 静岡県建築士会
富山県建築士会 石川県建築士会 福井県建築士会 滋賀県建築士会 長野県建築士会 中部圏
社会経済研究所 愛知県建設業協会 愛知県建築士事務所協会 三重県建築士事務所協会 静岡
県建築士事務所協会 愛知県建築住宅センター 静岡県建築住宅まちづくりセンター 日本建築
家協会東海支部 日本建築家協会北陸支部 日本建築学会東海支部 日本建築学会北陸支部 日
本建築協会東海支部 東海建築文化センター